
1億円以上の男

槍手 持手男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1億円以上の男

【Zコード】

Z9221E

【作者名】

槍手 持手男

【あらすじ】

「千回以上ある特定の言葉を言うと、その強い念に引かれて千回女が現れるという。千回女に出会った人間は、一週間後には、死んでしまうと言われている。千回女が現れる方法や、死ぬ方法等は特定されなく、その語られ方にはバリエーションがあると言われている。」という都市伝説が流行りはじめているらしい。

第一話：死にたい俺

死にたい…。

俺は今バスに乗ってる。

今は会社帰り。

今日は早退した。

もうやんなつた。

夕日がまぶしい。

血の色をしている。

死にたい。

全部消えちまえばいい。

全部糞だ。

俺はこの世界の全部を嫌ってる。
全部消えてほしい。マジで。

ふざけんな。くそが…。

死ねばいい。

俺は吐き捨てるように思った。

「ちょっと怖い噂聞いたんだけどさあ～

「なになに～？」

「千回女って知ってる?」

「何それ～？そのネーミングマジうけるし～。」

ふと俺の耳に黄色い馬鹿臭い女子高生の会話が入ってきた。

俺の後ろで何やら話してた。

何がそんなにおもしろいのかわからないが、ギャハギャハ笑ってる。

かんにさわる笑い声だった。
マジ、うざい。

「なんかA子って女が某丁区に住んでたんだってさ。」

女の一人が話し始めた。

「そのA子は会社勤めで、まあ普通に会社通つて普通にくらしてた
んだけど、
どうやらA子はちょっとウツ系な女だつたらしいの～。
でさ、いつも死にたい死にたいって言つてたんだって～。」

「うわ～、やばいね。
病気じやん。」

鬱病だつて言つてんだろうが。
ちゃんと話を聞けよ、糞が…。

俺はヤジをとばした。

「でさ、そのA子の日課つてのが、毎口のよつに鏡に向かつて『
死にたい』つて言つてた訳よ。」

「ちよっと、マジそれやばいからあ～。」

「でね、その日もね、A子は鏡に向かつていつてた訳よ。
『死にたい』つて。

そしたらさ…

プルルルーブルルル

暗い部屋に電話の音が鳴り響いた。

A子は突然の音に一瞬びっくりしたが、気を取り直して電話の受話器をとった。

『もしもしし……？』

何も答えない。

A子は不気味に思つてもう一度つぶやく。

『もしもしし……？？』

すると…………

『イマカラムカエニイクカア？…』

ブツツ……、ツーツーツー……。』

「え。え、で、どうなんの？」

……何の話をしているんだか。

下らねえ。

そう思いつつも、俺は話に耳を傾けていた。

「あ、ねえもうついたよ。」

「あ、ほんとだ。おりなきや。」

バスが止まつた。

女子高生一人はそういうて、おりていつた。

俺は話の続きを聞けなかつたことにいらついて、爪をかみながら恨めしく女子高生一人の背中を見つめた。

バスはそんな俺を無視するように発進して、おりた女子高生の姿はどんどん小さくなつていつた。

糞が…。

俺はもう一度つぶやいた。

家に着いた。

小つこいおんぼろアパートのきたねえ部屋。
洗濯しない服はそこら中に散らかつてゐるし、掃除機もまともにか

けてねえからそこり中に虫のしがいやら髪の毛やら、ふけやら『ミ
ガ散乱してゐる。

食べかけのカツラーメンとかコンビニ弁当も。

掃除する気なんて起きねえ。

この部屋は唯一の俺の楽園にして、地獄だ。

俺は長い間洗濯しない敷いたままの布団の上に倒れ込んだ。

「死にてえ…。」

誰にともなくつぶやいた。
狭い部屋に俺の声が響く。

死にたい。

殺したい。

消したい。

憎い。

全部消える。

俺が消えろ。

全部糞だ。

俺が一番糞だ。

頭を思わずかきむしる。

うるさい

うるさい

うるさい

頭の中に声が響く。

消しきやえよ

憎いんだろ？

全部憎いんだろ？

消しきやえよ

お前をこんな風にした奴らに回り思つてを味わはせられよ

うるさい！

俺は思わず耳を塞いだ。

「糞…。」

「いつも『死にたい』つていつてたんだって。」

ふと脳裏に今日のバスの中での話がよみがえった。

「千回女って知ってる?」

「千回女?」

俺はふと思った。

都市伝説かなんかの類いだらうか。

無性に気になった。

俺はそのまま転がつて布団の横に転がっているパソコンに手をかけた。

電源をつけてインターネットに接続する。

「千回女」

俺は無表情でサーチエンジンに打ち込んだ。

驚いたことに最近はやつてるらしいのか、検索結果がずらりと出てきた。

俺は「新・都市伝説」と書いてあるサイトへと飛んだ。

そのサイトは背景が真っ黒で文字が赤で書いてあるよくある類いのサイトだった。

「寧に不気味なBGM付きだ。

俺は迷わずnew!とかいてある「千回女」というリンクをクリック

クした。

そこには「書かれていた。

「千回女

つい最近話題になりだした都市伝説。

千回以上ある特定の言葉を言うと、その強い念に引かれて千回女が現れるといつ。

千回女に出会った人間は、一週間後には、死んでしまうといわれている。

千回女が現れる方法や、死ぬ方法等は特定されてなく、その語り方にはバリエーションがある。

よくある語り方としてあげられるのが、

千回女が現れる前に電話がかかってくるといつもの。電話に出ると『今から行く』といつ不気味な声が聞こえるといつ。

なんじやこいつ。
。せ

俺はため息をついた。

いつそ、千回女が現れてくれりゃあどんなに楽か。

そんなことを思つてゐる自分がウケた。

「もう死のう。」

俺は誰にともなくつぶやいた。

俺は誰にともなくつぶやいた。

もう死のう。

明日。

死のう。

会社にも行かず、明日、死に行こう。

そうだ。

樹海がいい。

あの有名な樹海に行こう。

そこで死のう。

今は冬だ。

うまく行けば、迷つて凍死できるかもしれない。

それがいい。

明日、樹海に行こう。

俺は何もする気が起きなかつた。

そしてそのまま、俺はその部屋で眠りについた。

明日でこの糞みたいな人生ともお別れだ。

明日、おさらばしよう。

でもその前に誰かに復讐してやろうか?
いや、それさえも面倒だ…。

「死のう…。」

寝ながら俺はつぶやいていた。

第一話・電話

朝。

正確には曇か。

本来ならとっくに会社にいって仕事をしている時間。
でも今日は会社に連絡さえもいれてない。
でも、不思議とイヤな感覚はない。

俺は昨日の夜、歯磨きも風呂にも入らずに寝たから自分から悪臭が
していた。

ひげがかなりのびた感覚さえする。
でも、もう歯も磨く必要もない。
風呂に入る必要もない。
髪を梳く必要もない。

俺は重い足取りで、そのまま自分の部屋を出て行つた。
鍵も閉めずに。

どうせとられるものなんて何もない。

どっちにしろもうここには帰つてこないのだ。

鍵をかけようが、かけまいが、たいした問題ではない。

肩には昨日も使つていた会社用の鞄を背負つている。

正確にはそれしか持つてないのだ。

鞄の中には、財布が一つ。

樹海に行くには十分の金が入つてゐる。

—やういえ…。

俺はバス停に歩きながらふと思つた。

鞄の中を歩きながらみてみると思った通り、財布の他に携帯も持つていた。

「糞つ……。」

俺は思わず吐き捨てた。

本当は携帯は持つてくるつもりはなかつたが……。
まあ、いいか……。

使わなければいい話だ。
使う予定もない。

俺は、ふらふらと、バスに乗つた。

行き先は樹海。

バスに乗つてから数時間後、俺は樹海の中にいた。

樹海の中に入つてからはもう一時間ほど歩いただらうか、周りはもう日が下がつてくる。

田が完璧に下がつてしまえば、歩き回るのも危険になる。

わけもわからず歩き続けたが、なかなか、樹海の奥のほうまで入つて来れたようになつた。

俺にはコンパスもないし、もつこから出でるのは無理だらう。
唯一生命線である携帯もあるが……。

俺は鞄から携帯を取り出してみた。

思った通り。圈外。

これでもう誰も俺の死を邪魔しない。

誰かが見つけてくれない限り…、近いうちに死ねるはずだ…。

俺は近くの木の根に腰を下ろした。

「死ににきたぜ。」

俺は誰にともなくつぶやいた。

俺は木の幹を背もたれにして座りながら周りを見つめた。

樹海は静できれいだつた。

いつもいる都会とは大違いだ。

これでよかつたのかな。

少し冷静になりながら俺はふと思つた。
走馬灯のように俺の人生を思い出す。

たかだか28年の人生。

あんまい思い出はなかつた。

むかつくなことばっか。

いいことないし。

「犯罪起こさなかつただけでありがたく思えよ。」

俺は誰にともなくつぶやいた。

あたりはすっかり暗くなり始めた。
しかもかなり寒くなつてきた。

俺は目を閉じる。

「死のうー。」

その時だった。

一 プルルルル、 プルルルル

俺はふと目をあげた。

混乱した。

どこからなってるのか。

でも、思い当たる所は一つしかないー。

俺は自分の鞄を開けて、携帯を取り出す。

「なつ…。」

俺は思わず声を出した。

携帯は圈外なのに、音を出している。

非通知設定だと？

どうしたことだ？

そのとき、ふと脳裏に思い浮かぶ。

「「千回女って知ってる?」」

俺は自分の背中に冷たいものを感じた。

「千回女が現れる前に電話がかかってくる。」

「「でさ、いつつも死にたい死にたいて言つてたんだって。」
「うわ、やばいね。病気じやん。」

「ば……バカバカしい……！」

俺は吐き捨てるのみにいた。

携帯は鳴り止まない。

俺は思わず携帯を放り投げた。

プルルルプルルル

携帯は鳴り止まない。
ずっとなり続いている。

「千回女に出会つた人間は、一週間後には、死んでしまうと言われている。」

死ぬ
？

ふと俺は思い出した。

俺、死のうとしてたんだ…。

プルルルルルプルルル——

俺は放り出した携帯の近くに歩み寄った。

—ならいつそ殺してくれ。

俺はさう思つて携帯電話の通話ボタンを押した。

「もしもしー。」

俺は電話を耳にあててつぶやいた。

第三話・太郎？

「あー。今からこわがすかー。」

ブツシ。

つは??

男の声。

聞きえない声。

でもやけに明るい。

俺は呆然とその場に立ちすくんでいた。

「うわッ……」

ドスン。

俺の後ろに今何かが落ちた。
今、何か大きいのが落ちた。
そしてなんか叫んでた。

振り返るべきか。

振り返りざるべきか。

「糞ツ……！」

誰だ、このやつ……！」

俺は勢いよく後ろを振り返る。

携帯の画面ライトを窓からして田の前のものをみてみる。
もがきもがきとする影。

「イテテテテ……。」

どうやら痛がってる様子ではある。

男：？

若い。

大学生ぐらしか、さわやかな、なかなか、イケメンだ、（糞つ

つて）……！

つて）……、誰？

「ちゅう…。まぶしいんですけど。それ。」

男は俺の携帯電話を指差した。

「あ…、ああ…。」

急なことに勢いをなくした俺は携帯電話を閉じた。
閉じると同時に真っ暗になってしまった。

あまりの暗さに田の前の男が見えないので、俺は電気代わりに
携帯を開いて男を横から照らした。

「あんた…、誰？」

俺は田の前の男に聞いた。

男はにまつと笑うと

「あなた、渋皮 しぶがわ 泰人やすと？」

「うわ、なんですかあ、ここのは。」

俺の回答も待たずには男は多少混乱しながら周りを見渡した。

「ここ樹海ですかあ？」

「こんな所で何してんですかー？？？しかもこんな夜にー。
いやだなあ。もひ。うわあ、虫がたくさんです。」

「僕の好きなコートが汚れちゃうじゃないですかあ。」

「ちょっとどうしてくれるんですか、汚れたらクリーニング代出してくれださいよー。」

「っていうか本気でなんでこんな所にいるんですかあ？」

「聞いてないですよー！」

それはこいつの台詞だ。

男はマシンガンのよつて文句をぶーぶー言つてる。

つていうかお前ほんと誰…？

俺は目の前の男を見つめた。

男はやつと俺の視線に気づいて一瞬口を開じる。

「ちょっと…、そんなに見つめられたら…、僕だつてドキドキしちゃいますよ…。」

殴りとばしたい…。

このふざけた男を、今すぐ。

「ふー。」

男は何事もなかつたよつて言つとすくつと立ち上がった。
僕を見つめる。

「えーっと。渋皮 泰人。」

「な…、何だ…？」

自分の名前をフルネームで呼ばれて俺は身構えた。

この男、立つと俺よりも背が高かつた。
それだけで俺はいらつくし、身構える。
男なんてそんなもんだろう。

「えーっと、とつあえずおめでといひにじこますー！」

つは…？

男はそつこうと紙を何やら取り出した。
その紙にはでつかく「マニユアル（初めの出版に編）」とかいて
ある。
しかもピンクの文字だ。

「えーっと。

（棒読み）おめでとう、君はとってもラッキーな男だ。

（棒読み）何故なら厳選なる抽選の結果、君はとってもラッキーな
権利を獲得したのだから。

えーっと、

（棒読み）これからは大船に乗つたつもりで、この %
”#DHF-#（棒読み閉じ）、あ、これ僕の名前ね。

（棒読み再会）に身を任せて生活をしてもらいたいと想つ。

（棒読み）与えられた期間は一週間。共に有意義なものとしてもら
いたいと思つ。

（棒読み）FROM #\$_&, , !? (\$#

「…。」

すまん。わけわからん。

しかもこの男の名前はもつとわけわからん。

あと最後のFROMの後もわけわからん。

男は俺に全く伝わってないのがわかつたのが少し困ったようにな
った。

「あの～、よつば、一週間君と一緒に僕が生活をしてあげるって」とですよ。」

は…………？？？？？

「つって……！誰も頼んでねえええ……！……！……！つていうかてめえ、何なんだよー？しかもてめえの名前発音出来ねえよおお……！」

俺は男にわめいた。

男は俺のつばをいやそうに受けながら、耳くそをほじくっている。

「僕の名前は、 % #DHF-#です。（つていうか、僕のコートつばでよ）さないでくださいよ。」

あ、でも、もし発音出来ないなら、そうですねえ、（それより僕のコート、クリーニングに出しますからね、もうー）

「…………。」

「…………（もちろんクリーニング代は渋皮泰人持ちでお願いしますよ。）…………太郎とでも呼んでください。」

「ああー！？太郎だあー？」

しかもその間はなんじゃこりゃああ！？？ああ！？

ついでいいか話題を一いつ回こぼれ…！

はああああああ！！！

疲れる！この男疲れる……………！

俺がそう叫ぶと、…………太郎は得意げに笑つた。

「僕ですかー？」太郎の白い歯がきらめいた……よつた気がした。
「一億円の口トよりも価値のある男ですよ（棒読み）。

―――と言えと書いてあります。

「……………」太郎が初めての出会い編
のマニュアルを俺に見せてにんまりとした。

「つてことで、渋皮泰人、よろしくお願ひします。」

何やらとんでもないことが始まりそうだ。
俺はふと思つた。

それともこれはー、夢か…？

そうだ。夢だ。

俺は夢を見ているんだ。そこに決まってくる。

「嫌だなあ、夢じゃないですよ。（こんなにいい男の僕が夢なわけないじゃないですか。）」

まあ、こいつの台詞の後半は聞かなかつたことにしつらひ。

太郎は俺をみながらにんまりと笑つた。

白い歯が暗闇に光つた…ような気がした。

第四話・俺と俺？

俺は神を恨んできた。

なぜ、俺にこんな糞みたいな運命ばかり与えるのかと。
そして、その神が臨終を心に決めた俺に与えたのは、目の前のこの
変な男との変な出会いだ。

マジ、恨む。

「で、結局お前はどうから来た訳?
何なの。いつたい。」

さつさと出会ったこの男、太郎を俺は仁王立ちしながら睨みつけた。
手の携帯電話の微妙な光が太郎の顔を青白く照らしている。

「僕ですかあ？」太郎は間の抜けた声で笑いながら答えると、空を見上げて指を上に向かた。「来た所は、上…ですかねえ。」

「は…?上?」俺のいらつきの混じった声とは対照的に太郎はうれしそうにうなずいた。

「はい。上です。」

こいつヤバい。
いつもまってる。
頭どうかしちまってる…。

俺は目の前の一見さわやかな男をまた見つめた。

太郎と名乗ったこの少し頭のおかしいヤローは、見かけは普通だ。
普通…、というより、顔立ちはむしろ奇麗なほうだ。

さつさからこの男が気にかけている白いパートと、その中のファッショソも落ち着いた感じだし、おしゃれと言えばおしゃれだ。

おそらく、俺とは違つて全てユーロコードィネートなんといふないんだろう。

ふつうにしてたらモテる部類に入るだろう……」この男の醸し出している雰囲気、何かがおかしい。

この男。何ががいかれちまつてるぜ。

俺は手に握った携帯電話を閉じた。

目の前の男をみているのもこりつぐ。

わけもわからないし。

何よりかかわり合いたくない。

糞つ……、なんだつつーんだよ……。

「あーっ、真っ暗になっちゃいましたよー。」

とぼけたような口調で太郎が言つ。

「まあ、いいや。」

そうこうと、男はどこから取り出したのか、懐中電灯をつけた。それで自分の顔を下から照らしてにっこり笑つた。

「僕のこと、もつと聞いてください。これから一緒に一週間暮らすんですから、特別に色々教えてあげます！どんと来いってね。」

俺は太郎に背をむけようとした。多分、かかわらないほうが多い。この男、マジやばい。

一週間一緒に暮らすとか…、一人で妄想してやがる。

「渋皮泰人ー。

どこいくんですかー。」

太郎はそういうと、俺の前に歩いて回ってきた。
男が前にくると、俺は反対を向く。

また俺の前に男が回つてくると反対を向く。

こういう時はシカトに限る。

糞うざい。

「仕方ないですねぇ。渋皮 泰人クン。」

「…。」

俺は男を無視した。

マジ、うざい。

「気づいてませんか？足下。見てみてください。」

予期していなかつた注文に俺は少し気になつて自分の足下に目線をやつた。

「…つ！…？？」

俺は思わず、飛び退いた。

人らしき物体がいる。

いつの間にか、俺の足下の近くに倒れて。

暗すぎて輪郭しか見えないが。

せつ…先客か…?
自殺…者?

「そんな間の抜けた声だすなんて、情けないですなえ。
よく見てくださいよー。」

太郎はそうじつて持っていた懐中電灯をその人間に照らした。
どうやら男らしい。

男はうつぶせに、土に顔をうずくめるようにして倒れ込んでいるため顔は見えない。

中肉中背。いやいや、けつこうトブいぞ。メタボがはいり始めてる。
それに…、ちょっと後頭部が薄くなり始めてる…。

苦労してんのかな。

…っていうか、男の着ている青いチェックのシャツ、ベージュのチノパン…ものすごい見覚えがー。

そんな俺をよそに太郎はしゃがみ込んで男の体を反転させた。
ごろん。

「つ…つ…？」

俺は思わず目を見張った。

そうー、男は俺だった。

俺がいた。

俺の足下に俺が倒れていた。

そして、俺は、その俺を立ちながら見つめている。

「な…つ…つ…！」？？？」

「ハハー、驚きましたか？」

「……つ…………つ？…………つ！？」

その衝撃は実際に味わないとわからないだろうが、あえて言つなら、自分を初めて自分じやないと認識した気分だった。
まるで他人のように俺の足下に俺が、寝てやがるんだ。
その衝撃といつたら、言葉にできねえほどだった。
だいたいなんで俺がいるんだ？？
なら、いまいる俺は誰なんだ？
むしろ、俺の足下にいる俺は誰だ？
どっちが俺だ?????????
俺は…誰だ？

「何が起きたか知りたいですか??」

と太郎。倒れてる俺の隣にしゃがみ込みながら俺を見上げている。
耳をほじくつてやがる、こいつ。
むかつくし、あんまりかかわり合いたくなかったが、こう不可解な現象に見舞われちまつては仕方がない、早く教えるよ、コラ。

「うーん。まあ簡単に言えば抜けちゃったんですよ。」

は…？？抜けた？何が？？

言つてること全然簡単じやないし。

俺の混乱した顔を見ると楽しそうに太郎は笑つた。

「魂ですよー。ソ・ウ・ル。心です。Heartです。」

……つは？

目の前の馬鹿なことを言つ男を俺は思わず見入つちまつた。

この男…、マジいかれてるわ。

マジ怖。

少しでもこの男に答えを求めた自分自身を後悔した。

「クソ意味わかんねーから。」

俺は半分笑いながら漏らした。

すると、太郎はポンと手をたたいてうなずいた。

「あ、そつかー。そうでした。

ここでは、そういうことは一切知られてないんですつけ？」

「そういうこと？」俺は思わず聞いた。すると太郎はうなずいた。

「魂とかの仕組みですよ。」

……。

俺は言葉を失つた。

真顔で魂の仕組みなどを口にするいい大人の男が目の前にいる。そうそう見られる光景じやないだろうと思つた。

「渋皮泰人、僕を疑つてますね。

気持ちちはわかりますよ。

理解の範囲を超えているんでしょう？

やつぱり - (%\$JKLP) の想像どおりでした。
接触は上手く行くものではないのですね…。」

今、こいつの会話の中に入っていたわけなかんない言葉にやけに気を取られてる俺をよそに太郎は続けた。

「…「うーん。

でも、正直渋皮泰人も困るんじゃないですか?
ちゃんと僕に説明してもらわないと。不安ですよね?
だって、今の状況、全く理解しないでしょ?」

太郎の少し客観的な言葉に俺は思わず床に寝転んでいる俺を見つめた。

確かに今の状況は不安だ。

流石についさつきまで自殺しようとしたとは言え、いつもいきなり自分の理解を超える出来事が立て続けにおきると、自殺しようとしていた気持ちを忘れそうになる。

俺は少し間をあけてから、しぶしぶうなずいた。

「じゃあ。」太郎は言った。「僕と話をしてください。
精一杯教えますから、知っていること。
僕とのコミュニケーションを拒まないでください。
僕は別に怪しい者ではないです。渋皮泰人を傷つけるつもりもありません。」

いや、充分怪しいが…。

そつ思つ俺をよそに太郎は真顔でまつすぐに俺を見つめてきた。
太郎は、すぐさまつすぐで澄んだ目をしてた。（男の俺がいうのもなんだけどよ）

それは、長い間忘れてるような、すつごい純粹で奇麗なものを少しだけ思い出させた。

それだけだ、俺が太郎に對して

「わかつたよ。」

といつてしまつた理由は。

本当にそれだけ。

俺は床に寝てゐる自分の近くの木の根の上に座り込んだ。
何回見ても、やはり違和感を覚える。

目の前に自分がいるなんて状況、そうそうない。むしろ、普通ない。
確かに、こんな状況にいては、俺にはこの太郎以外、頼れるやつはないのかかもしれない。

俺はぼーっと目の前のもう一人の俺を見つめた。
そいつには意識がなさそつた。

目を閉じて微動だにしない。

ああ、俺死んだのかな？

これつて俗に言われる臨死体験つてやつか？

ああ……、やつぱり俺は死んだのか？

でも、ならいつ死んだ？

死んだ感触が全くなかった。

そもそも死ぬ感触なんてあるのか……？

俺はいつ……（ぶつぶつぶつぶつぶつぶつぶつ）

「ちよつ……、渋皮 泰人、一人で何かぶつぶつ言わないでください
よお。（正直怖いですから）

ちゃんと、息すつてますから。」と太郎は地面に眠つてゐる俺の鼻
をつまんだ。すると地面の俺は苦しそうに顔をしかめた。「ほらね。

心配」無いですよ。とりあえず死んでないんで安心してください！あ、ちなみに地面に寝転んでるのが体、今僕と話してる渋皮泰人が魂ですよ。」

くつたくのない笑顔で笑う太郎。

「とりあえず死んでないことだけはわかった。

そしてどうやら俺は魂らしい。

「体は魂がないと動きません。

魂が抜けた状態の渋皮泰人の体は生きていますが、生理的な反応しかできませんし、自ら意思をもって動くことはありません。」太郎は続けた。「ただ魂の状態つていうのもこの地上では不安定です。魂はこの地上に適した物質で出来ている体を着て初めて、この地上で生活することができます。

逆を言えば、この地上に適した物質で作られた体がないというのは、この地上に生きる資格、というか必要最低限の条件がないということです。」

……。

なんとなーく、言いたいことはわかる。
到底信じられないことだけれど。

俺は黙つて太郎の次の言葉を待つことにした。

「ちなみに、僕はこの地上での体はもうつてないんです。
だから、この地上で暮らす資格はありません。」

は……？

「何、お前幽霊なの？」俺は思わず聞いた。

だとしたら、びっくりだ。

俺は幽霊にあつたことになる。

俺が思つてた幽霊のイメージとはほど遠いが。すると、太郎は笑つた。

「うーん、ココの人たちが言つ幽霊とは、少し指してるもののが違いますかねえ。

体がないっていう点では同じですけど。

どっちかっていうと、僕はココの人たちがいう宇宙人に近いんですかねえ。」

つぶ。

これには苦笑だ。

宇宙人？

またこの男は真顔で笑わせるよつなことを言つ。

宇宙人だと？

でももしそうだとしたら、大スクープだ。

これは自殺なんて考え直して俺はこの大スクープをマスコミに売りにいかなきやなんねえ。

それとも、本でも書くか。

どちらにしても、こいつは金のなる木じゃね？

俺は色々頭を巡らし始めた。

何も反論しない俺に太郎は何の疑問も持つてないのか、ゆっくりとした口調で話を続ける。

「僕の仕事はココでの世界を上から見つめるだけだったんですけど

ねえ。

本当は、違う星に属してるもの同士はコンタクトはどうないのが大
鉄則なんですけど…、ちょっと状況が変わってしまいましてねえ。
初めてなんですよ、こんな風に実際に一週間も長期間で滞在するの。
しかも、こんな風に身分を偽らないで現地の人と「ミコニケーション」
をとるのは。

僕の仲間の一人は言つてましたよ。

絶対に僕らは受け入れられないから、口に降りるのは危険だつて。
でも、なんだかこうして渋皮泰人と話すことが出来て、僕はとても
うれしいです。」「

俺は何となくこの太郎のよくわからない話を聞きながら一つ疑問が
生まれた。

「そりいえばよ…。」と俺。「なんで、俺なわけ？」

俺の質問に太郎は俺を見つめた。

「ラッキーなことに厳選なる抽選の結果、渋皮泰人に決定したんで
すよ。」

「なんで俺なの？ 抽選って何？

つていうか、どうせ話し合うならもつと価値のあるヤローにすれば
いいじやん。

俺みたいな糞みたいな人生送ってるやつじゃなくてさ。」「

俺の言葉に太郎は首を傾げた。

「もつと価値のある人？

それに、渋皮泰人は糞みたいな人生を送ってるんですか…？？

「…？あ…？ああ、そうだよ。」

俺の答えに太郎は笑つた。

「何言つてゐるんですかあ。

おんなじ魂に価値の上も下もないじゃないですかあ、面白い」と言
うなあ。

それに、なんで糞みたいな人生送つてゐるですかあ、やつぱりおもし
ろいなあ、なんだか。」

太郎は可笑しそうに笑つてゐる。

でも、俺には少々太郎の笑いのつぼがわからなかつた。

「何が可笑しいんだよ、俺は自分でいうのもなんだけど、クズみた
いな存在だぜ、この世界にとっちゃよ。

お前が…、まあ宇宙人だとしてだ。（まあ信じられないが…）

俺みたいなやつの前に現れてもなーんのメリットもないぜ。悪いけ
どよ。」

俺の言葉に太郎は笑うのをやめた。

そしてすこしだけ悲しそうに笑つて呟いた。

「……そう、ですか。」

太郎が悲しそうに見えたのもつかの間、次の瞬間には何にもなかつ
たような明るい口調で太郎は続けた。

「とりあえず、僕は渋皮泰人と一週間生活をするために來たので、
申し訳ないですが、これから一週間は僕は渋皮泰人の同居人になり
ますから。」

「…はあ！？」突然の強引な展開に俺は言葉をつまらせた。「ふざ

けんなよ、勝手に決めんな。」

「それに、いいこと教えてあげましょつか。

その魂だけの状態じゃ、一人で生活するなんて無理ですよ。
僕が念力を送つてあげないと、周りの人々に認識すらしてもうなりませんから。

魂の状態は一部の感のいい人たちを除いて気配すら感じられないんです。

だから、どっちにしろ渋皮泰人には僕の力が必要なんですよ。
太郎は少しだけ勝ち誇ったように言った。

俺はそのちょっと上から目線の態度に腹がたつた。

「はあ！？ 尚更ふざけんな。

誰も頼んでねえし。

むしろ、知ってるか？

俺はここに自殺しにきたんだよ、そんな男がてめえに、頼むと思つか？

通常の生活がしたいから念力を送つて、なんてよ、ふざけやがって。
魂がぬけたならちょうどいいんだよ、俺は死にたかったんだからよ。

「俺は続けて冷たく吐き出した。

「俺はここに死ににきたんだよ。

てめえが誰だとか、もう興味ないから。

てめえが宇宙人でも幽霊でももうどーでもいい。

都合良く魂が抜けたら、俺は死にたいんだ。
早く死なせてくれよ。」

「どうだ。俺には俺の都合があるんだ。

とにかく、やっぱりこの太郎には早く失せてほしい。

話を聞くのは新鮮みはあるが、一週間も一緒になるとなると話が変

わってくる。

むしろ、いきなりの初対面でそんなことを言われたら誰だって引くだろう。

とにかくこいつとはそこまでかかわり合つつもりはみじんもない。

早く消えてもらつて、それから俺は一人でこれからのことを考える
としよう。

なんだか死ぬ氣も薄れちまつたし。

まあ、このまま流れで死んでもいいんだけど。

未練ねえし。

しかし、太郎は俺をつまらなさそうに見つめた。

「死ねますよ。」と太郎はあつさり言い切る。「そんなに死にたい
なら、そのまま体に戻らなければ嫌でも一週間後死にますよ。」

：一週間だあ！？

そんなにかかるのか…、糞…。

だつたら死ぬには、体に戻つてから自殺を図るしかねえのかな。
あー、とりあえず、体に戻りたい…！

「一週間じゃあ不満ですか？」太郎は俺の頭を読んでるように話を
続けた。「体に戻つて早く自殺をしたいですか？でも今の状況だと
体には戻れませんよ。」

「はあ！？なぜ、体に戻れない？」俺のつばが太郎に飛ぶ。太郎は
少し嫌そうな顔つきをしながら答えた。

「だつて、戻りたいなんて本当は思っていないんじゃないですか？」

太郎は自分のコートのしわを手で伸ばしながら続けた。「魂も体もどちらもお互いを引き寄せてないですもん。

本当に戻りたいと思っていると、魂と体が互いを引き寄せるものなんですね。

それでも、戻れないのは、どちらかに迷いがあるからです。再び自殺を図るために戻りたいと思っているなら、尚更戻れないのは明らかです。

なりゆきで体に戻りたいと思つても、生きることに絶望して希望を見いだしてなければ、結果は同じことです。」

……。

何も言えなかつた。

でも、ならどうすればいい?

俺は、このままどうすればいい。

「絶望した魂は体には戻れません。そういう魂は一週間後に死ぬを、魂の状態で誰にも認識されずに彷徨い、待つしかないです。それは言葉でいうよりもとても過酷で悲惨な状況です。

でも、渋皮泰人、あなたはラッキーなんです。

体に戻れなくとも、誰にも認識されず、魂としてこの世界を一週間も彷徨う必要はありません。

僕をそばに置いてもらえば、魂の状態でも僕の念の力で今までのようない普通の生活が送れます。」

太郎は僕を見つめた。「悪い話じゃないでしょ?」

……確かに……。

このまま一週間待つのは辛すぎる。

しかも誰にも認識されずに、何もせずにただ一週間すゞすのは、確かに辛いかもしれない。

でも待てよ。

どうせ死ぬなら、もう会社に行くのもばからしいな。

そうだ。どうせ一週間後に死ぬのがわかってるなら、好きなモノを好きだけ食べて、好きな所に出かけて多少悪さをして、遊びほけて暮らすのもありかもしない。

将来の金の心配をする必要もない。

.....。

……最高じゃねーか！

俺は太郎を見つめた。

「いいぜ。」

「一週間。てめえを居候さしてやるよ。」

使えるものは使う。

それが俺流だ。

第五話・樹海

太郎は思つ出す。

宇宙から、初めて暗闇に輝くこの青い星を見た時のことを。

「キレイよね。このホシ。」

そう言つて彼の近くに寄つてきたのは、% A S F # \$ & a m p ; 〇。しかし、発音が難しいからこじではヨシ子といつづ前にしておひづ。

ヨシ子と、太郎はその他数人と共に一緒にシップに乗つていた。彼らは派遣されていた。

この宇宙の一 角にある青い星に。

「あ、ヨシ子。はい、感動です……！
早く、あの地上を見てみたいです！
地上はさぞかし綺麗なのでしうねえ。」

「……」ヨシ子は、手元の書類に目を通しながら飲み物をすする。
「やうやう順調じゃないみたいよ、あそこヒトたちは。ホラ。」

とヨシ子、太郎にその書類を手渡した。
その書類に目を通す。

「……え。

魂と体との調和がとれずに、がんじがらめのヒトが多いんですねえ。体から離脱したがる魂が多いみたいですし。もつたいないですねえ。体を連れられるなんて、特権なのにねえ。」

「でもあ、俺家に帰りたいんだけど、どうすればいいわけ？」

俺は目の前の太郎に聞いた。

「どうすれば、とはどういうことですか？」

「ほけたようになり男。
無駄にいらっしゃる。

「一週間は俺は普通に生きれんだろう？なら家に帰んなきゃ話に何ね
ーだろ。こんなとこにずっとといられないわけ。
でも俺、コンパスも何も持つてないの。樹海の出口どうやって見つ
ければいいわけ？」

それに、「俺は床に転がってる自分の体を指差した。「それ、どうす
ればいいわけ？まさかここに置いてくとかじやねえだろ。」

「あははー。」太郎は思い出したよつて手をポンとたたく。「体の
ほうは、そのままかですよー。」

は…？

「だ・か・ら、置いてくんですよー。」と俺の考えを読んだよう
に太郎、にっこりと笑う。

体置いてくつてー

「ひ…ひて…、口に置いてく…？」思わず怒鳴りながら太郎の胸

「俺の体を口においてくだあー!?」ぐらをつかむ。

俺の体を一週間もここに放置するだあ！？

龜山文庫

それに一週間先にみんな林に置い

それは一週間もこんな机は置いたら
野犬は食へられる。…？かもし
れねえ……！！

俺の体はエサじゃねえんだから……」冗談じゃねえ

太郎は驚いたように苦しそうに叫ぶ。

「……ひつぱりなこでへだせこ、僕の服……」「一トが……やぶれぢやあります……苦じい……！」

にしてるんですか！？

少し触つて動かすぐらいのことはできても、持ち上げて担ぐなんて大業、魂レベルの僕たちには出来ないんですっ！！！
なので置いてくのは仕方がないんですっ！！！
わかつたら放してくださいっ！！！」

10

俺は太郎のつかんでいた胸ぐらを放した。

動かせる動かせねえの論理はよくわからねえが……俺、そういうえば、

確かに、なら体がどうなるかと気にしたもんじゃねえか。

体が腐ろうと、野犬に食われようが、凍ろうが……、一週間後に死ぬ

なら、もう体は必要ないんだつたつけか。

糞。なんだかむかつぐが、確かに必要ねえか。

「…はあ、もうここを離れる前には、ちゃんと腐つたり、野犬に食べられたりしないような工夫はしていきますから…。」

ぶつぶつと呟くあいつ。おれはあいつを無視して話す。

「…家に帰るにはどうすればいい？」

「…なんでそんなこと聞くんですか？」俺の質問に太郎はあっけらかんと答えた。「帰りましょうよ、帰りたいんでしょ？僕も連れてってください。」不思議そうに手をぱちくりとさせている。

「…だからどう帰ればいいんだよ。」

このわけわかんないやり取り。妙にむかついた。

太郎は不可思議そうに首を傾げて、胸ぐらのポケットから分厚い一冊の本を取り出した。

そこにはでつかくマニコアル（ヒートの属性編）と書かれている。

「へえー、そつかあ。そなんですかー。」あいつはそれを読みながらぶつぶつ言っている。少しつと、太郎はその本をバシンと閉じてホールの中になってしまった。

「あのですね。ホールの人たちは、あまりその力に気づいてないらしいんですけど、」と太郎。「魂というのは、とても強い存在なんですよ。

願つたことを実現する強い力を持っているんですね。」

「は？」

あいつの話はわかりにくい。いつも唐突だ。ついていけない。

太郎は一生懸命に説明を続けた。

「えー、行きたい所を頭に浮かべてそこに行きたい、と願えばいけるんです。」と太郎。「えー、例えばですよ、今の渋皮泰人みたいに、樹海から出て家に帰りたいとするします。まず樹海の出口を頭に思い浮かべて絶対に出るんだ、と念じながら歩けば、自然とこの樹海の出口につくるんですよ。」

うそくせえ。

「はあ。」太郎は悲しそうにため息をついた。「こんなに疑心暗鬼なヒト、初めてです。少しは信じてくれてもいいじゃないですか。信じてくれないと、家に帰れませーン。」

「…お前は馬鹿か？

言われて、『はい、そうですか』なんて信じるアホがビリビリいんだよ、そんなんじゃこの世界じゃ生きてけねーっつーの。言われたことには基本疑ってかかる方がいいのは常識だろ。お前今までどうやって生きてきたんだよ？』

俺がそういうと、太郎は悲しそうにじょんぼりした。

「疑うことが、必要なんですか…？」と太郎。

「はあ？」

「疑うことが必要な世界なのですか、口口は？」

はあ…。

またこいつはわけわかんないことを…。

ああ、そういうえばこいつ宇宙人なんだっけ。忘れてた。

「ああ、そうだよ。この地球って星は疑う心が上手く生きていいくには必要なな。

疑つて、他人をどれだけ上手くだまし通せるかが基本なわけ。
それが出来ない奴らはいきてけねーの。

弱肉強食。わかる？

お前がどこから来たかは知らねーけど、お前の星みたいに甘くねえ
わけ。口口は。」

どうだ、地球をなめやがつて。

俺は自身あらげに太郎をにらんでやつた。太郎は悲しそうに俺を見
返す。

「…。

でも…、僕はうれしいです。

やつと、少しば僕のこと信じてくれたんですね。」太郎はそこまで
言つと微笑んだ。

はあ？

「だつて。」と太郎。「僕が上から來たこと、わかつてくれたみた
いだから、うれしいんです。」

俺はあつけにとられた。

やつぱ馬鹿だ。この男。

「一ひとぢぢりにせよ、渋皮泰人が念じて出ようつて思わない限り、僕も渋皮泰人もここから動けませんよ。

それが唯一のここから出る方法ですから。

僕は、あくまで渋皮泰人がいる場所についていくことしかできませんでした。

この樹海で一週間すゞしますかあ？

あんまり楽しくないかもしれませんけど……。

僕はかまいませんよ？」

なつ……、俺は人生最後の一週間は楽しんで過ぐすんだ……。
今までのうつぶんを全てはらしてやるつて決めたんだ……。
こんなところに死ぬまでいるなんてことができねえ……！

そんなことを俺が思つていると太郎がきょろきょろと周りを気にかけて始めた。

「どうしたんだよ？」俺が声をかけても太郎は周りを不思議そうに見回すのを止めない。

「いえ、ね、さつきから沢山感じてはいたんですけど。」と太郎「かなり近づいてきましたねえ。僕らに。」

「は、何が？」と俺。

「そこには……一番近いヒト、いるのでしょうか？」太郎はさうこつて持っていた懐中電灯を俺たちのすぐ近くの大木に当てた。

ヒト？

俺は気づかなかつたぞ。

俺は大木に目をやつた。

「…………」大木の影が静かに動く。

「誰だ、出てこいー？」俺は大木の影にどなつた。

「……っ…わたしがつ…見えるの…………？」

は？見える？

わけのわからない言葉を呴きながら静かに大木の影から出てきたのは女だった。

顔色の悪いやけに白い女。

20代後半…？30代？

年齢はわからない。

美人でもなければものすごいブスでもない。ようは普通。点数で言えば、4・5点ぐらいか？ちなみに10点満点中だ。

やせてもなれば以上に太ってるわけでもない。どちらかと言えば大柄か？

そんな俺をよそに女は消え入りそうな声を絞り出した。

「…………やつと、…………やつと誰かに…………、氣づいてもらえた…………。」

女はそれだけ呴くと目から大きな涙の粒を次から次に流した。
そして鳴きながらその場に崩れたようにしゃがみ込む。

つていうより誰…？
つていうより、何？

あつけにとられてる俺をよそに太郎はその女の近くに寄った。
女の近くにしゃがみ込むと、泣いている太郎は優しく声をかけた。

「悲しいですか？」

太郎の言葉に女は俯きながらゆっくりとうなずいた。
うなずくたびに女の肩まで伸びた髪が揺れる。
不気味な女だと思った。

だいたいなんでこんな所にいるのか。

この女も死にに来たのだろうか、この樹海に。
俺も女と太郎に近づいてみる。
女は俺が近づくと顔を上げた。

目があう。近くで見るとけつこうかわいい。

さつきの点数は嘘だ。 + 3 - 5 で、8点に俺は訂正した。

「どうしてここに？」太郎は彼女に聞いた、「と思つたら太郎は俺の方を向いて聞いてきた。「というより、さつきから気になつてたんですけど、この樹海、なんなんですか？」

「何つて？何だよ。」いきなりの質問に、逆に俺が聞く。

「この樹海には、すつごに沢山いるんですよ。」と太郎。

「何が？」と俺。

「魂がです。」と太郎。「んー。あー、口の人たちがいう幽霊つてやつですかねえ。」太郎は笑顔で微笑んだ。

「…。」

幽靈…。

子供じみた言葉だ。

俺は、どざまきしながら女に目をやつた。
いきなりこんな暗い樹海で出会った二人の初対面の男たちが、幽靈
の話をしようとしてる。

こんなばかげた状況に女は引いてるんじゃないかと思つたからだ。
引かれるのは慣れてるが、やはり女の冷たい視線は心に突き刺さる。
でも、女は俺の予想をよそに、遠い目でどこかを見ていた。
ますます不気味な女だと思つた。

俺は太郎に視線を戻した。太郎は俺の言葉を待つていろよつだつた。

「まあ、ここには」俺はわけがわからず口をゆっくり開いた。「自殺
の名所だし。」と一言。

「名所！？」太郎は俺の言葉にびっくりしたような顔をした。俺は
やつの言葉にうなづく。というより、樹海に俺みたいな自殺者が來
てる時点で普通気づかねえか、普通の樹海じゃないって。
あ、でもやつは自称宇宙人だっけか…？また忘れてた。

俺の頭の中をいろいろと考えが回る。そんな俺をよそに太郎は「へ
ー」とでもいわんばかりにキヨトンとしている。

「自殺の名所なるものが存在するのですか…？？」やつの質問に俺
は再度うなづいた。太郎は不思議そうに頭をかしげた。「驚きました…。
だからここにはこんなに沢山の魂の気配を感じるんですね。

「

魂の気配…、幽靈？

沢山…、いる…？

ふざけやがつて…、といいたい所だが…。

そう思つて俺は自分の転がつてゐる体に視線をずらした。

俺自体、魂だけの存在みたいだし？

俺はそこまで考えてぞつとした。

おそるおそるまた女に視線をやる。

「その魂だけの状態じゃ、一人で生活するなんて無理ですよ。僕が念力を送つてあげないと、周りの人には認識すらしてもらいませんから。

魂の状態は一部の感のいい人たちを除いて気配すら感じられないんです。」

さつきの太郎の言葉が俺の頭の中にこだまする。

…」の女、さつき、俺と目があつた…。

あ、それとももう太郎が念とやらを送つて俺を一般人にも見えるようにしてるのか？

あーわけわからんねえ…！！

「渋皮泰人、勘違いします。」混乱している俺をよそに太郎は楽しそうに笑つた。「言つたでしょ？」の樹海には、すつごい沢山いるつて。」

「ねえ…。」そんな俺たちを遮つたのは、さつきの女だった。「あなたたち、誰…？どうしてわたしがわかるの…？」

「だつて、僕らもあなたと似た存在だからですよー。」太郎は女に向き直つて笑いながら話した。

似た存在。

俺は理解した。

この女。魂だけ。幽霊か？

「初めて見た。」俺は思わず呟いた。

俺の言葉に太郎は笑つた。

「残念。完璧に幽霊ではないですがね。」と太郎。「ねえ？ そうでしそう？」

女は太郎に聞かれると太郎を不安そうに見つめた。

「…わたし、死んでるの…？」

女はどうやら覚えてないらしい。

女は俺たち以上に混乱しているようだった。

いや、正確には俺と同じぐらい混乱しているようだった。

「わたし、死んだのかあ。」そういうと女の顔が緩んだ。悲しそうに、でも安心したように微笑んだ。「そつか。」

「まだ死んできませんよ。」そこに釘を刺すように太郎が呟く、と同時に女の笑みが止まる。「まだ体は生きています。そこにいる渋皮泰人と同じ状況です。」

「！？」驚いたのは俺の方だった。どうやら女は俺と同じ状態らしい。

ということは、体から魂が抜けた状態。女の顔に不安の影が戻つた。

「わたし、生きてるの…？」女はそういうと、自分の腕を見つめた。すると、綺麗だった腕に次々と生傷が浮かび上がる。腕に浮かび上がる深い傷、浅い傷。正直グロい。

「いやああ！！」

女は自分の腕に次々に浮かび上がる傷に悲鳴をあげた。

俺が悲鳴をあげたい。

「…。」太郎はすると無言で悲鳴をあげる女の腕に優しく自分の手を置いた。女は悲鳴を止めて太郎を見つめる。

太郎は首を横にふった。

「苦しいことは思い出さなくていいですよ、魂になつてまでそんなに泣かないでください。」

太郎の言葉に女の目からまた大粒の涙が次から次へとこぼれ落ちた。と同時に腕の傷が消えていった。

わけがわからない。

俺はただ黙つてその状況をみつめるしかなかつた。

第六話・不信

「…。」

女は大分落ち着いたようだつた。

静かに気の根の上に座つて遠くを見つめている。
端から見れば廃人のようにさえ見える。

不気味で静かな様子だつた。

俺はといふと、太郎を女から離れた木の陰に呼び出していた。

「なんなんだよ、あの女。」

「なんなの…って。魂ですよ。」と太郎。相変わらずの調子だ。

「なんで、あいつはあそここいるわけ？」

「行く場所がないからでしょ？別にいいじゃないですか。害があるわけではないですしお。

見た所、彼女の体のほうはもう長くないみたいですし。」と太郎。

「何、お前そういうのわかるわけ？」

「そりゃあ、わかりますよ。（なんてつたつて知的キャラで通つて
ますから）」太郎、ちよつと自慢げに笑う。

「あいつ、体が死んだらどうなるの？」俺の質問に太郎は少しだけ
きょとんとした。

「…。」太郎は一瞬黙つてから呟いた。「普通は体が死ねば、去る

「去る? サル? は?」
「…………。普通は。」

太郎は驚いたように俺を見つめた。

「……そうか……、知られてないんでしたね。」と手をポンとたたく。

「はあ?」

「いえいえ、僕もこのホシのヒトといつやつて顔を会わせて話すのは初めてなので、どこまで知られているか、とかついつい忘れがちになってしまいます。すいません。

でも、こいつやって知識の共有ができるなんて素晴らしいことですね、タハハー。

いや、ほんと、僕も渋皮泰人からこのホシについて教えてもらいたいことは沢山あるわけですし。

僕も、渋皮泰人に教えてあげられることがある、本当に感動的です。はい。」「

どうでもいいから早く教えるよ、くそ。

ここでのこいついう面倒くさいこともつたいぶりがいらっしゃせ……。

「はは、すいません。ついこの素晴らしい瞬間に感動してしまって……」と太郎、何が感動的なのか俺には全く理解できない。奴は続けた。「あのですね。

さっき僕は体はそのホシに生きるために『えられた資格のよつなものだと言いましたよね?』

そういえば、言つてたつけ。

ほんとかどうかは知らぬ一ヶビ。

「はい。では、体の死とは、どうこう」とだと思いますか?」と太郎。

どうこうといつて…。

「…もしも、お前が言うように体が資格だつたら…」と俺、あいつの話に従順につきあつてゐるのに微妙な違和感を覚えながらも考えて答えていた。「お前がいつ、資格がなくなつたことになる…?」

「そうです。そのホシに生きるために『えられた体がなくなつてしまえば、体を失つた魂はそのホシにとどまる理由がありません。いいえ、正確には…』太郎はそこまで言つて上を見上げた。俺もつられて上を見る。

背の高い木が空を少し隠している。

でも、空が見える。星が綺麗に光つてた。
こんなに綺麗だつたつけか、空つて。

「そのホシで生きるという使命を終えたんです。
だから去るんです。ホシを。」

そう言う太郎は穏やかな顔をして空を見上げていた。

使命とか、体がむず痒くなる言葉。俺はへどがでそうではあつたが…、認めたくはないが、目の前で半ば恥ずかしいふざけた非科学的なことをぼざいているのに、この男に俺は、不思議と、いらっしゃは感じなかつた。

「…あつや。」俺はとりあえずそれだけ呴いた。それから木の陰から女に目を移す。「じゃあ、あの女もあと数日で去るわけだ。」

太郎は俺の言葉にゅつくりと首をふつた。

「彼女の場合、体が死んでも、恐らく去れません。」

去れない？例外もあるということか？

「なぜか知らないの？」

太郎も木の陰から女に視線を移して呟いた。「自殺したヒトや、生きているときに感じた強い想いに駆られているヒトは、去れません。正確にはこのホシにどどまる」ことを、自分で選んでいると言つた方が正しいのか…。」「

何、あいつ自殺なわけ？

太郎は続けた。「未練つて言葉で言い表せばいいのですかねえ。それとも悲しみとか、憎しみとか、そういうつた言葉で表せばいいんでしょうか…。僕には上手く言えないですけれど。」

「で、去れないとい、どうなる？」

俺の質問に太郎は顔をしかめた。「強い悲しくどす黒い気持ちに魂が縛られていれば、徐々にそれは悪夢のように魂を蝕んでいきます。」彼女の魂が今ちょうど、そういうった状態です。

最終的には全て忘れて、理性も失って、ただただ醜い想いに駆られ

て狭間を彷徨い続ける魂になるでしょう。

去ることも出来ず、堂々と生きることも許されない、ただ彷徨うだけです。」

いつてることがよくわからなかつた。

ただ、俺はそれに悪寒を感じた。

俺は死んだら全てが終わると思ってた。

生きているときに感じる苦しみも、永遠のよつに感じる暗闇も。

でも、あの女を見たら何となくわかる。

あの女の中では何も終わつてない。

何も解決されない。

あのうつろな目を見ればなんとなくわかる。

むしろ、続いている。苦しみが。

俺にはわかる。

廃人のような瞳。気持ちが悪い。鳥肌がたつ。

「死は何の解決にもならなかつた、と言つた所でしょうかね。」太郎は遠い目をした。この男もこついう田をするのか、と思った。それはすごく冷たく感じた。「どうです？予想外とでも言つた所ですか？」と奴は俺に視線を移して呴いた。

「俺はどうなる…？一週間後に体は死ぬんだろう？

それとも、俺ももうすぐあの女みたいに暗闇に支配されるのか…？

…そもそも俺はなんで魂だけになつちまつたんだ…？

そうだ、なんでだ！？

太郎は俺の言葉にしまつたとでもいつよつと口を歪ませてひきつった。

怪しい。

そうだ。俺は確かに自殺をしようとしていたが、首をつった覚えもないし、手首を切った覚えもない。むろん薬も飲んでない。魂が抜ける理由がない。

俺はまだ自殺をしてなかつたんだから……。

俺がしたことと言えば……そうだ。

あのふざけた都市伝説を思い出して、携帯に出たんだ……。

そこまで思い出して俺は太郎ににじみよる。

「……そ、そ、そ、それは」太郎は苦々しい顔をした。わざと俺と視線をあわせない。太郎を睨みつける俺、そして胸ぐらをつかんで上に引き上げた。「ぎやー！すいません。それだけは勘弁してください……苦しいのは嫌です！！！」

「じゃあ話せ！！俺はなんで抜けたんだよ！？」「ワワア！」

「話します！話します！……だから放してください……！」
俺は太郎の胸ぐらを放すと太郎は息を整えた。「はあ、じ……実は僕がここに来たとき、僕、落ちてきましたでしょう？」

そういうえば、あいつ上から落ちてきてたっけか？

「あのとき、渋皮泰人は気づかなかつたかもしませんが、僕……渋皮泰人の上に落ちたんですよ。」

は……？

「お、怒らないでください……！」

どちらにしろ、話の流れによつては魂と体を分離する予定だつたんです！

僕はそのために来たんですから……！

たまたま僕が渋皮泰人の上に落ちて、たまたまその衝撃で魂抜けちやつたんで、そのまま話を進ませてもうつただけの話ですから～！

たまたま抜けた？

たまたま衝撃で抜けちゃつただあ～！？

ふざけんな、こいつ。

「でも、どつちにしろ渋皮泰人も分離することを望んだはずです！」
はい、

死を望んでいたのなら尚更です……、はい。」

太郎はたじろぎながら一生懸命に何か言つてゐるが、俺は怒りを感じるだけだった。

もともと分離する予定だつただあ～！？

つてこいつはじゃあ、俺を殺しにきたのか？

魂を抜いて、こいつは俺の魂を食おうとでもしてゐるのか……？

つていうかこいつ何者なんだ！？

本当にこいつなんで俺の前に今いるんだ……！？

なんの目的で俺に近づいてきやがつたんだ……！？

そうだ、そもそもそこが意味わかんねえ！！！

あー～～～d s f ひ o s t f . j r .j f m v d k m 3 9 r 3 ! ! !

俺の中で情報が爆発した。

こいつに会つてからといつもの、混乱されるは、わけわからぬもの見せつけられるは、で、神経がどうかしてたみたいだつた。
そうだおかしいことが多すぎた。

それなのに、半ばそれを受け入れ始めてた俺がいた。

そうだ、落ち着け、俺。考えろ、常識的に。

そうだ。この目の前の男。おかしい。この男、奇術師か何かか？

俺は催眠術にでもかかつてたのか……？？

あー。わけわかんねえ！！！

糞つ……！胸くそがわるいぜ……。

あああ——！——！——！

「糞野郎……俺につきまとうんじやねええ……！」

早く俺を体に戻して、どつかに失せやがれ……！」

キレた。

俺はキレた。

そんな俺に、雷につたれたかのように衝撃的な顔をする太郎。

「ええええ！？そんなんあ！！

さつき、僕を居候にしてくれるつていつたじやないですかあ！
いきなりそんなのひどいです！——！」

「ふざけんな……」のペテン師があ……！

この糞があ！——」

「なつ……！」

「ふざけんなよ、てめえ！——！

どうでもいいから早く俺をもとにもどしゃがれ……！——！」

「それはできませんつば……！——！」

ガス……俺はまた太郎の胸ぐらをつかんで上に引き上げる。太郎

が苦しそうに俺の腕をつかんでもがいた。

「ハハハ……」

「うぜえんだよ……！てめえ、殺されてえのか！？ああ！？
俺を戻さないとどうなるかわかつてんだろうなあ！？」俺
は太郎に力まかせにどなりちらした。

そう、「冗談じやない。

このままあの女みたいになるのも、彷徨うのも。
糞みたに這いずり回って生きるのも
馬鹿にされて惨めな想いをするのも……

(じゃあどうして欲しい…?)

ふとそんな疑問が頭の中をこじだます。

俺は思わず太郎を放した。

ドサ。太郎はそのまま地面に倒れた。

終わりにしたい……。

俺のこの糞みたいな人生を……。

どうしてだ…？

なぜ、終わってくれないんだ？

糞……死んでも終わらないなら尚更なんで俺は生まれてきた？
こんな糞みたいな想いをするためだけに生きてきたのか…？
だとしたら…、だとしたら…。

「……」太郎は座り込んでいる。

「早く失せろ、『モミ』が。」俺は地面にへたり込んでいたいつとは田をあわせずに吐き出した。

「……つべつ……つて……。」が、あいつの妙な奇声に俺はゆっくり視線を太郎へと向けた。

!?

俺は目を疑った。といつより固まつた。
泣いてやがる。

太郎の大人が肩を震わせながら号泣してやがる……。

太郎は俺の視線に気づくと、涙をぼとぼと流しながら呟いた。

「つすつ……つい……つま……つせん……ずびつ……ぼ……ボグのつ……こ
とはあつ……氣に……しなくつ……て……つひつく……結構……つ……ですつ
から……。ズビ……。」

……言葉になつちやない……。

俺……何か悪いことしたか……? ? ?

……したか……。

でも糞……、どうすりやあいいんだつてんだよお……。

こんなに泣かれちゃあ俺の良心も痛むもんだ。

「い……いいつ……ヒック……つんです……。気につ……しな……ついで……。」

もともとクールっていうタイプではなかつたが、こうも異常な行動をされると、せつかくのイケメンも効果なしで、世の中やはり外見だけではないのかもしれない、と俺は関係ない所に興味を引かれつつ、目の前の太郎を見つめた。

「……より、初対面で大泣きする男…、初めてだ…。
引くを通り越して、なんだか情けなくなつてくる。
糞…、ほんと、疲れる…。

「……お、おい…、その…何泣いてやがるんだよ…。」俺はしゃ
がみ込んで太郎に呟いた。

太郎は目も鼻も真っ赤にしながら小刻みに震えながら泣いていた。
泣いてるレベルで言うと「号泣」、いや「嗚咽」のレベルまでいく
ほど泣きっぷりだ。

葬式以外で大の大人がこういう鳴き方をするのは見たことがない…。
…つていうかなぜ？はあ。

「…うぐうつ…。すい…つませ…つん…。ただ、…ただ…、かなつ
…しく…つゝて…。」

太郎は俺の疑問を読んだように答えてくれた。
悲しい。らしい。

「…。」

俺は言葉を失つてため息が出た。
出る言葉がない。

そんな俺をよそに太郎は大分落ち着いてきたのかさつきまでの小刻
みの震えが収まつてきていた。

俺は黙つて太郎が口を開くのを待つことにした。

「…はあ…。すいませんでした…。大分落ち着きました…。ズビ。」

と太郎。そういういつも、まだ顔ではナイアガラが流れてる。「…つい悲しくて。ズビ。」

「何が？」

俺は冷たく泣いている男に問う。

太郎はナイアガラを流しながら俺を見つめた。

「いえ…、僕は…僕なりに…一生懸命がんばって…いた…つもりなんですが…。

こうも…心が届かないと…、ふがいなく感じます…。

それに…やはり…悲しい言葉は…心に…突き…刺さります…。

そんな…言葉を…言わわれては…、やはり…ひたすらに…悲しい…です…ズビズビ…。

太郎はいいながら鼻をすすつた。ナイアガラは勢いを止めない。むしろ、強まった。

「でも…、気にして…ください…。悲しい…言葉を言わせてしまって…、渋皮泰人…を…混乱…させてしまった…ので…、だから…ごめん…なさい…。」

謝られた。

むしろ謝るのは俺の方だと思った。

「…。」

でも、俺は謝らない。

俺はそういう男じゃないし。

謝り方なんてしらない。

俺は太郎の前に座り込んだ。

照れくさいのは嫌いだ。

太郎と目をあわせないよう俯いた。

「すいま…せんね…。時間をくだされば、収まり…ます。」

太郎はそういうながら深い息を吸つた。

数分ぐらいの沈黙のあとだろうか…。

「渋皮泰人。」太郎の声で俺は俯いていた顔を上げた。

目と鼻の赤い太郎。幸いナイアガラは枯れていた。

「…。」

なんだかぎこちなさを感じた。

「すいませんでした…。でも、僕、うれしかったです。」

は？突然の太郎の言葉に気がぬける。

「だつて、渋皮泰人、僕が泣いている間ずっと隣にいてくれました。
優しい人ですね。」

開いた口がふさがらない。

俺はますます何もいえなくなつた。

「あの…。

さつき言っていた…、その僕はもう渋皮泰人の前からいなくなつた方がいいなら…、僕はこのままいなくなります。」太郎はぎこちなさそうに咳く。「ただ、僕は体に戻す力なんてありません。」このまま、渋皮泰人が体に戻らなければ、あの女性と同じように恐らく生前抱いていた想いに支配されて彷徨う魂となるでしょう…。

「…………どうすれば体に戻れるようになる?」

「…希望を見つける」とです。希望を見つけて強く生きたいと願えば…戻れます。」

…希望…?

希望って何だつてんだよ…。

「ようは、一週間以内に生きたいと思えればいいんだり?」

俺は平然を装つた。希望なんてわからない。

俺がそれを見つけられる可能性なんてゼロに等しかった。

俺の質問に太郎はうなずいた。

「はい…。ただ…」

「もういい。」俺は太郎を遮つた。

キレたとはいって、自分で言つたことだ。
自分でおとしまえをつけようつと思つた。

「どこにでも行け。

俺は、一人でどこにかしてみせる。
早く行けよ。」

太郎は一瞬目を見開いて、悲しそうに立ち上がった。

「じゃあ…、僕は…行きます…。

…困つたら…、呼んでください…。

一応一週間は僕は渋皮泰人の側にいるのが任務なので…。」

そういうつて太郎は俺に背を向けて歩き始める。

「おい。」俺は思わず太郎を呼び止める。「俺はやっぱり一般人の目に見えないのか?」

太郎は振り返つて呟いた。

「見えません…。

…。

…どうか…、お元氣で…。」

それだけ言つと、太郎はそのまま樹海の奥へと消えていった。

俺は暗闇の樹海に一人取り残された。

周りでは静かに木々がざわめいていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9221e/>

1億円以上の男

2011年1月5日14時36分発行